

経済マンスリー [原油]

リビアの大幅減産が懸念される

原油価格（WTI 期近物）は、米欧によるシリアへの軍事介入観測が強まる中、8 月末には 110 ドル台と 2011 年 5 月以来の高値に上昇した（第 1 図）。9 月に入り、原油価格は 107～110 ドル台の高値圏で推移したが、米国によるシリアへの軍事介入に対する懸念がひとまず和らいだことから 105 ドル近辺に軟化した。18 日には米量的緩和の継続を受けて需要後退観測が弱まり、108 ドル台に反発している。

内戦が続くシリアの産油量は、足元 8 月は 6 万バレル（日量、以下同様）と平時の産油量約 40 万バレルから大きく落ち込んでいる。しかし、シリアよりも産油量が減少しているのはリビアである。リビアは平時に約 160 万バレル生産していたが、8 月は 55 万バレルと平時から▲105 万バレルの大幅減少となっており、その影響が懸念される。

リビアでは、2011 年に反政府デモにより内戦状態が続いたため、産油量は大幅に減少し、2011 年 8 月にほぼゼロとなった。同年 10 月の内戦終結に伴い原油生産は再開され、2012 年には 139 万バレルと平時の 9 割近くまで回復していた。

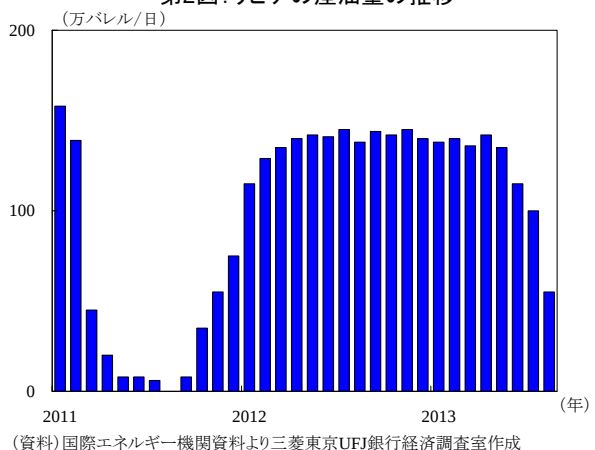
しかし今年に入り、主要原油輸出ターミナルで労働者ストライキが頻発している。ターミナルが操業停止に追い込まれたことから産油量は大きく減少しており（第 2 図）、9 月初めには 15 万バレルに落ち込んだ。スト終結に向けた政府と当事者の交渉が生産回復のカギとなるが、平時の水準まで回復するには時間を要しよう。

こうしたなか、サウジアラビアは 7 月から増産しており、8 月の産油量は 1,019 万バレルと 32 年振りの高水準となった。増産は、国内需要増加と旧ソ連諸国や中国の減産への対応とされているが、リビア減産の影響を緩和する意味合いもあったようだ。今後もサウジアラビアがリビアの生産動向を睨みつつ、機動的に対応する可能性が高い。

第1図：原油価格（WTI期近物）の推移



第2図：リビアの産油量の推移



照会先：三菱東京 UFJ 銀行 経済調査室 石丸 康宏 yasuhiko_ishimaru@mufg.jp
篠原 令子 reiko_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。